

0. 新石狩市教育プランへの提言にあたって

新石狩市教育プラン（2025～2029）の策定作業がすすめられています。社会教育法は第17条で、社会教育に関し教育委員会に助言するために行われる社会教育委員の職務として、最初に、社会教育に関する諸計画を立案することをあげています。教育プランも、この「社会教育に関する諸計画」の内容を含んでおり、この策定にあたっては、社会教育委員の会議としての意見や社会教育委員の意見を反映することが大切だと考え、社会教育委員だけで議論するのではなく、今、市民の皆さんが、石狩市の地域と社会教育の現状や将来について、どのように考えているかを中心にヒアリングをしたうえで、その結果も踏まえて、社会教育委員の会議で議論を行ったうえで提言を作ることにしました。

1. 子育てや子育て支援に関わる社会教育の課題

（1）乳幼児の子育て環境について

- ・石狩市はとくに乳幼児の子育て環境が整っていると感じている市民が多いのです。これは、自然が豊かで公園が多いこと（地域によるという意見もあった一近い場所に屋根のついたスペースがある公園があることは、子育てにとっても重要だと考える市民が少なくないのです。また市民同士のつながりを強めるうえでも大事な場所です）や交通量が少ないことなどから、比較的安心して子育てができると感じているからです。また、不妊治療の助成が厚いことや、月1回の子どもの検診があること、図書館によるブックスタートが行われており、子育てサロンのような親子が集い、交流し、学びあえる場所もある。これらは、若い夫婦が石狩市に住まいを持ち、子育てを始めるという動機にもなっているのです。少子化が進むなかで、どこで住まいを確保し、子育てするかという選択肢が広がっているなかで、石狩市が持つ強みのひとつであり、さらなる充実を進めることが社会教育・生涯学習を発展させることにつながります。
- ・このような子育て環境は、行政の役割はもとより、「子育てガイドブック」の刊行にみられるように市民活動と行政の協働が生み出したものであり、また、市民の学びの成果でもあります。

（2）学童期の子育ちの支援

- ・児童館は働く親の強い味方の役割を果たしていますが、夏休みや冬休みには、楽しい催し事など、より様々な体験や学びができる場であることが望まれています。これらは、その企画と実施に子どもたちの参加も得て進められるべきです。また、夏休みや冬休みなどを利用して、支援者やボランティアが配置され、学習支援が行われることも期待されています。
- ・これらは、市民がボランティアとして積極的に参加するとともに、子ども福祉行政と社会教育行政の連携を今迄まで以上に強めることが要請されています。また**地域学校協働**の取組のなかで、放課後に学校内で「寺子屋事業」や「囲碁教室」等が取り組まれています。このような学校支援に市民がもっと広く関わられるようにすることが大切です。そのためには、中学校や高校のクラブ活動の現状を知るなど、

今、子どもたちの学びと育ちに、市民がどのような参加・協力が求められ、また可能かについて考えることも必要です。そのためには、子どもたちの成長、進学に応じた**切れ目のない支援**を石狩市全体でどのようにすすめるかについて、広く多世代の市民に開かれた、対話し学ぶ場を積極的に設けることが求められています。行政が縦割りをこえて、どのような連携が求められ、可能なのか、多くの市民、市民活動組織の参加も得て検討されるべきです。

(3) 図書館など社会教育施設の役割

- ・石狩市民図書館は、石狩市民にとっては誇りとすべき社会教育施設です。これからの石狩市の社会教育・生涯の発展にとって、間違いなく「核」としての位置を占めることが期待されています。一方、若者たちをはじめ（これは大人も例外ではなく）「読書離れ」が進んでいると言われていきます（『現代思想』という雑誌は、今年の9月号で「読むことの現在」を特集しました。また、三宅香織さんの著書『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（集英社新書、2024年）がベストセラーとなり話題を集めています）。若者や子どもを中心に人々の関心はマンガ、アニメ、映画、ゲームなど多様化する視覚文化の方に向かっているのではないかと、スマホやAIを介して伝えられる情報で十分だとか、新聞やテレビの時代は終わったとか、そういう様々な見方や議論が氾濫しています。図書館がどういう情報を収集し、アクセスできるようにするべきかだけでなく、そもそも、どういう場所であるべきなのか、ということについてじっくり話し合う時期にきています。
- ・公民館は、移転して、どこにあるか、どういう方法で行くことができるか、どのような事業が行われていて、どのようにしたら参加・利用できるか、をもっと知ってもらうことが求められています。公民館をもっと知ってもらうような機会を、公民館を拠点に活動しているサークルの皆さんと一緒に作りあげる必要があります。
- ・公民館など、社会教育施設への公共交通機関でどのようにアクセスできるかを、市民に周知徹底することと同時に、公共交通機関のアクセスを向上させることが大切です（公共交通機関の整備が不十分であることが石狩市の問題であることは複数の市民が指摘しています。そのなかには、札幌へのアクセスが十分でない指摘する市民も少なくありませんが、ここでは、まず市内の社会教育施設を含む公共施設へのアクセスの手段としての公共交通の問題です）。
- ・施設によっては、駐車場との距離が離れている場所もあるとの指摘があります。また、そもそも公共施設に車がなければ行けないと指摘する市民もいます（モータリゼーションありきの公共施設の配置になっているのです。公共施設と公共交通手段のアクセスの問題は、社会教育施設の問題にとどまらず、高齢化のさらなる進展によって重要な地域課題のひとつであり、社会教育としても多くの市民とともに対話し、学ぶべき課題になっています）。

(4) こども食堂について

- ・石狩市には「こども食堂があつたら支援ができるのに」という子どもや保護者が少なくありません。その実態について、石狩市でこども食堂がどれくらい必要とされているかを考える「開かれた対話の場」が必要です。ここで、こども食堂に関わった経験の共有や対話を行い、こども食堂に関心をもち、自分ができる協力はしたいと考える市民が参加して議論を行うことは、それを契機として、高齢者をはじめボランティアとして関わりを始める人も少なくないことが予想されます。

- ・こども食堂は、子どもの「居場所」としても重要であるばかりでなく、石狩市の子どもが置かれている現状が可視化され、多くの市民にその解決の重要性を気づかせる発見と学びの場でもあります（そういう気づきをした「こども食堂関係者」もいることが私たちのヒアリングでもわかりました）。

（５）子育てや子育て支援の活動についての今後の課題

- ① 子育て支援における市民活動と行政の協働をさらに発展させ、そのために必要な学習の機会を当事者の意見を反映させてつくりだす。
- ② 学齢期を含む切れ目のない支援をさらにつよめ、子ども福祉行政と社会教育行政の連携・協力を強化する。
- ③ 図書館の今日的役割について、図書館協議会を中心とし利用者やその他の関係者に開かれた対話の場をつくる。
- ④ 公民館が誰でも利用しやすくするため、アクセスも含め、広報を強める。同時に、公共交通手段を使つての社会教育施設へのアクセスの方法を整備し、利用の仕方を周知徹底する。
- ⑤ こども食堂が石狩市にどれぐらい必要なのか調査し、必要とする子どもが利用しやすい方法を幅広い関係者の参加によって検討する。

２．石狩市の地域課題と社会教育

（１）社会教育活動が抱える問題

- ・石狩市の社会教育（他の市町村ともほぼ共通しているのだが）、とくに施設の利用者や「いしかり市民カレッジ」の参加者について、以下の諸点が指摘されます。
第１に、参加する人がごく一部の市民に限られていることです。第２に、同じ人がいくつもの活動を掛け持ちしていることが目立つということです。第３に、世代交代がうまくいっていない。若いメンバーが加わらず高齢化がすすみ、リーダーのなり手がいないためにリーダーが高齢化しているのです。これは、社会教育活動だけではなく、殆どの市民活動が共通に抱えている問題です（だからこそ多くの市民と共に考えることが重要な課題なのです）。
- ・石狩市が誇るべき特徴のひとつは、市民活動がさかんで、様々な分野で行政との協働が行われていることです。しかし、今、市民活動も、（１）で指摘した問題に加えて、活動資金の不足にいつも悩んでいること、活動を進める上で問題にぶつかった時、悩んだ時に、相談に乗ってくれる場がなかなかないことがあります。市民の側に相談にのってくる窓口がないということは、それは、反対側からみれば、いままで市民活動の相談に乗ってきた関連機関等の「**受援力**」が低下している、ということが指摘されています。
- ・「**受援力**」の低下とは、能登半島地震の際、初期のボランティア活動の受け入れ態勢が整っていなかったため、活動を控えることが求められ、その後も過去の大震災に比べて活動者数が増えず、避難所や在宅避難者、小規模な集落への支援など被災者の多様化が進み、きめの細かい支援が必要になっているにもかかわらずボランティアの不足が続いている中で用いられた言葉です。ボランティアの受け入れが後手に回り、結果として被災者に負担がかかっているのは、少子高齢化や過疎化と市町村合併の進行のなかで、支援を求める人と支援をしたい人とを結びつける自治体や社会福祉協議会のマンパワーが減少していることを指して言った言葉です（「能登

半島地震初期のボランティア活動の現状と課題」『ウォロ』2024年2・3月号、No. 533、11頁）。支援を求める人と支援したい人を結びつける力は、行政や社会福祉協議会だけが持っている力ではありません、市民活動やその中間組織も持っている力でもあるのです。NPOやボランティアグループの「受援力」を強めるように働きかけるのも行政の役割です。受援力とは、つながりを作る力であり、支えあいを生み出す力です。とくに社会教育行政はそういう市民活動がつながり、対話、交流し、学びあう場をつくることのできるはずなのです。

（２）「いしかり市民カレッジ」の成果とその課題をめぐって

- ① 「いしかり市民カレッジ」について調査した藤女子大学の学生は、市民カレッジについて、次のように評価しています。素晴らしいと思う点は、市民たちが自分たちの力で運営し、何年も長い間活動を継続してきていることであり、講座を開催するためには、企画の段階から様々な準備があり、膨大な仕事量が必要であることを学ばせてもらった。社会人がお金を出して仕事のために受講するようなクオリティの高い講座を運営委員やスタッフがボランティアとして15年もの間続けてきていることは貴重である。一方、課題は運営の担い手の高齢化である。地域社会の高齢化がどんどん進んでいくので、市民カレッジのように、市民が気軽に参加して人と人がつながりを感じられる「場」はより価値が高まっていく。だからこそ、現在生じている運営スタッフの高齢化を解消して、まだまだ継続していける活動になってほしいと強く思っている。
- ② ヒアリングに応じた市民からもスタッフの高齢化への不安が表明されました。世代交代がうまくすすんでおらず、若いメンバーが入ってこない。平日の昼間に開催される活動が多く、現役世代が参加しにくくなっているという意見、またオンラインでの開催も技術的な理由からか実現していない、という声もありました。若い人が加わってくるようにするには、まず若い人たちが知りたい、学びたいことを若い人たち自身に企画してもらうことです。また、土曜日や日曜日、平日の夜の開催については、そういう企画を考えてくれる人たちにさせてみてはどうでしょうか。せっかく続いてきた活動をさらに発展させるためにはこのような柔軟性をもつことが必要ではないでしょうか。これらの問題についてメンバーだけでなく外部の信頼できる人たちにも加わってもらって議論してみてもどうでしょうか。
- ③ プランの原案でも、「近年の社会においては、新型コロナウイルス感染症による生活・行動様式の変化、国際情勢の不安定化や燃油価格の高騰による物価高など、前例のない事態が次々と起こり、また、AI・ビッグデータ・IoT（Internet of Things）などの先端技術が高度化しているほか、高齢化や人口減少が進み、産業の担い手が不足するなど、これまでの常識が通じなくなるほど、社会の在り方が劇的に変化しております。このような将来の予測が困難な時代においては、未来に向けて自らが社会の創り手となり、社会課題を解決する力を持つ人材が求められています」と述べられていますが、世界では、ウクライナやガザでは、たくさん子どもや女性を犠牲にしているロシアやイスラエルの蛮行を世界中が非難しているのに、私たちはその戦争をやめさせることができないでいます。日本でも、防衛のことやエネルギーをどう確保するか、夫婦別姓のことなど意見が大きく分かれていながら、ほとんど議論が行われていない問題がたくさんあります。世界中で分断が進み、日本でも同様に分断が生まれることが心配されます。埼玉大学名誉教授の暉峻淑子名誉教授は著書『対話する社会へ』（岩波新書、2017年）で、「戦争の反対語は（平和ではなく）対話です」と述べています。上述したような「現代的課題」についても「いしかり市民カレッジ」は講

座のテーマとして取り上げ、「対話」の場を作りだしてきました。これはたいへん貴重なことであり、石狩市民がおおいに自慢としてよいことです。これから、このような「現代的課題」について市民が学び、「対話」する場をたくさんつくりだすことはますます重要です。だからこそ「いしかり市民カレッジ」の学びは貴重であり、多くの市民が関われるようにすることが急がれるのではないのでしょうか。

(3) 希望を語る社会教育

① 故郷「いしかり」の誇るべきものを皆で学ぶ。

- ・石狩市社会教育委員の会議は、2015年11月に、「厚田を石狩市の宝に一石狩市民が知っておきたい〇〇のこと」というワークショップを市民と共にとり組んだことがあります。46人の市民が参加し、厚田保健センターの多目的ホールでワークショップを行いました。「自然・風景」、「生活・市民活動」、「産業・資源」、「教育・文化」のグループに分かれて話し合った結果は、私たちの思惑をこえたものでした。
- ・「望来坂からの風景」、「濃昼山道」、「道の駅」、「厚田神社祭り」、「望来豚」、「1年中操業できる厚田の漁業」、「あい風図書館」、「厚田港の朝市」など一つひとつの場所、風景、産物、イベントなどが提案されるだけでなく、参加した皆さんから報告された議論の内容は以下「報告書」からの引用が長くなりますが、「産業・資源」について話しました。海の幸だとニシンやハタハタ、山の幸だと米というように、厚田には海の幸、山の幸の両方があるという結果となり、そこから色々今後どうしていくべきかについて話が盛り上がり、「厚田の宝」については後回しになってしまったのですが、年中おいしいものが獲れて、素材はたくさんあるものの、発信の仕方や素材の生かし方というアピールがまだできていないという結論になりました。道の駅ができるので、生産者が採れた素材を活かしていくことが必要になります。例えば、私の家では長芋を作っておりますが、おいしく食べられる方法を説明した上で、道の駅に併設するカフェスペースで、長芋と望来豚を使った料理を提供する、というようなアピール方法があるのではないかという話がありました。課題は多いのですが、アピールの仕方は色々な方法があるだろうということが、皆さんと話し合った内容です。また、「厚田公園には恋人の聖地やキャンプ場、資料室など、色々な施設が集約されていますが、特にキャンプ場はおすすめの場所です。綺麗な場所であることはもちろんですが、浅瀬の小川が流れていて、そこで遊んでいる子供たちの姿を大人がいるキャンプ場から見ることができ、自然の中で安心して遊べる場所であることなどを、もっと広めてもいいのではないかという話をしました。また、恋人の聖地の屋上から見える四季折々の景色はとにかく最高で、特に夕陽は格別です。他にも景色が素晴らしい場所があります。それは望来坂です。…外から来た人たちからは、望来坂から見下ろす景色がとても素晴らしいという話をよく聞きます。あの風景を見ただけで、水と風と土が一体となり、描きたくするような素晴らしい風景だそうです。観光スポットとして整備することにより、もっと魅力が上がるのではないかという意見がありました。夕陽が綺麗な厚田と、望来坂から見える海岸線のラインと山々の景色。それを融合させて、自然の魅力をPRできるような仕組みができればいいと思います。これらの素晴らしい景色は厚田の誇りです。大切なことは、山、川、海など、今あるフィールドを活かした魅力作りであり、さらに地元の方も、もっと身近な自然に目を向け誇りに思い、可能性をさらに広げるべきではないかということを感じました」(「ワークショップ報告書」)など、皆さんの報告は、私たちが最初に予想していた報告とは違って、何か一つのことだけについてではなく、例えば厚田は海の物と山

の物とが一緒に楽しめるとか、一年中おいしいものがあるというような発表がされていました。

- ・つまり、厚田の魅力というのは、一つ一つのものはもちろんですが、それらを一緒に組み合わせさせて楽しめる地域であることなのです。一つ一つの宝物が、個別ではなくつながりを持っていて、人に見せたり楽しんでいただけることを、皆さんが自信を持って語られていました。それぞれのグループの話から、とても多くのことを知りました。厚田に来た人たちは、水がおいしいと言ってくれるそうです。豆腐や農作物がおいしいのも水が良いからでしょうか。安瀬から流れてくる水がおいしいという話や、小学校の運動会や学芸会では、必ず餅まきがあつて、子どもたちは餅を入れる袋を忘れないようにと学校から案内されるそうですが、これらもそこで育った人たちの大切な思い出ですし、皆に引き継がれてきた地域の大切な生活文化でもあります。私たちが知らなかったことも含めて、厚田には多くの人に知ってもらいたい魅力がたくさんありますし、そういう魅力を知ってもらうための色々な課題がワークショップを行うことでわかったのです。今では見られなくなったルーラン海岸を他の人々に見てもらいたいとか、星空や夕陽、月の光などを楽しんでもらうためには、食事をした後泊まる場所も必要であるとか、このようなことをじっくり学習しながら議論する中で、地域づくりを進めていくことが今一番大事なことであり、これは厚田だけではなく、石狩全体で取り組んでいくことが大事であると、あらためて気づかされたのです。石狩市の魅力について、みんなで学ぶこと。そのような学びの成果を子どもたちに伝える機会を作ること、魅力のある宝物にはかならずそれを守り、人々に知らせようとする地域の人々の努力があること、石狩市の観光は、そういう魅力ある人々との出会いを求めるものであることをもっとたくさんの人々に理解してほしいものです。

② 希望としての若者や子どもの参加

- ・NPO 法人エゾロックは、よく知られているのは、8月に石狩で行われる北海道最大級の音楽フェスティバル、RISING SUN ROCK FESTIVAL 2024 in EZO で環境対策活動をボランティアで行っている団体です。ロックフェスティバルは今年は8月の16日から18日までの3日間開催されました。事務局は札幌市中央区にあります、その活動の一つに、浜益ベースの活動があります。
- ・浜益区に一軒家「はまますベース」を借り、宿泊・滞在しながら「快適でサステナブルな田舎暮らし」を考え、浜益の関係人口を創出する活動づくりを行っています。札幌市などから通ってくる学生だけでなく地元の若者も参加しています。その若者たちにもヒアリングすることを計画していたのですが、ロックフェスティバルと重なり、今回の提言づくりまでには残念ながら間に合いませんでした。
- ・彼らの活動には、『集落の教科書 石狩市浜益区 あなたもきっと好きになる』づくりがあります。これは、浜益について・浜益の『一年』・浜益で『暮らす』・浜益の『たみ』・浜益の『食』・浜益の『個性』・浜益での『教育』・浜益の『今と昔』・浜益『写真館』・『浜益ベース』のこと、全73頁にのぼるものです。「編集後記」には、次のように書かれています。この取組は「現地の生の情報を大事にするため、実際に浜益に来て、インタビューを実施しました。多い日で1日に4本のインタビューをすることもありました。実施後には、収穫等、浜益の取組のお手伝いをすることもありました。振り返ると、この活動は普段から浜益で活動している『いちものつながり』があったからできた取組だと思います。そして、これからはこの教科書が『浜益に関わる入り口になる』と感じています。この取組に関わった浜益区民や、作成に関わったメンバーの想いにぜひ触れてください！最後に、浜益で待っています」。ここには、他にも「新しく浜益に報れる方に一言」と地区の方の声もの

っており、とても面白いものになっています。

- ・石狩市にはこんな魅力的な若者たちがきっといっぱいいるのです。彼らの声を聴き、彼らの背中をおすことが私たちの役割です。彼らにいろいろな決め事や企画をおこなう場所にどんどん参加してもらいましょう。彼らの意見を地域づくりに反映させましょう。
- ・忘れてはいけないのは「浜益」にはこのような若者を育てる力があるということです。それは、石狩市全体に言えることだと思います。過疎化や高齢化に嘆くのではなく、ここにこそ私たちの希望があります。

(4)石狩市の地域課題と社会教育の今後の課題

- ① 石狩市の地域づくりにおける市民活動の役割をさらに高めるために行政との協働をさらに発展させ、双方の受援力を高める。市民活動が相互に交流し、お互いの経験を学びあう学習の場を市民活動と行政の協働でつくる。
- ② いしかり市民カレッジについては、メンバーの高齢化がすすんでいることも踏まえて新たなメンバーの参加拡大を支援する。たくさんの市民が自分たちが学びたい講座を自ら企画し、実施することをいしかり市民カレッジやそのほかの市民活動、社会行政が支援する。こうした人をいしかり市民カレッジがメンバーとして受け入れられるように支援を行う。そのことにより土日開催や平日夜の学習機会を増やす。
- ③ 国民の間の分断をふせぎ、SDG s や地球環境やエネルギー、平和と民主主義、貧困と格差などの現代的課題についても対話が生まれるような学習の場を市民の参加により企画・実施する。その際、いしかり市民カレッジが今まで担ってきた役割を引き続き発揮できるように支援する。
- ④ 石狩が自然に恵まれ、豊かな歴史があること、そしてそれらを学び、さらに大切にしようとする取り組みをしている市民がいることを道内・道外を含む多くの人に知ってもらい取組を強める。石狩には沢山宝があり、何よりもその宝を引き継ぐようと努力している人々がたくさんいることを知ってもらう@。石狩を観光することは何よりもそういう人たちに会いに行くことだということを市民が共通して認識できるような社会教育や地学協働が求められる。
- ⑤ 過疎と高齢化で諦めるのではなく、皆で希望を捜しをしよう。それはとくに、若者や子どもの存在である。若者や子どもの声に真摯に耳を傾け、事業や施策の企画や実施に参加してもらう。そのための学習の場も一緒につくり上げる。